
水口 幸夫

浅野高等学校3年

模擬国連という活動は私にとって刺激的なものでした。自分を成長させるためには自分にはないスキルを兼ね備えた人物に出会い、刺激を受けることが最も効果的だと思うのですが、模擬国連はそのような体験に最適な活動であると感じています。負けず嫌いな性格の自分にとって、「すごい」と思った相手に出会うとなんとかして超えようと努力し続けたことが、模擬国連で得たかったスキル（具体的には、個人によって異なると思いますが、リーダーシップ力や交渉力等）を向上させることに繋がりました。だから無我夢中だった自分の1年半の模擬国連活動はとても充実していました。

模擬国連の国際会議に参加することは「他の大使から刺激を受けて自分を成長させる」という点で大いに実りのあることです。自分と異なるバックグラウンドを持った人は当然考え方も異なるので、自分の中での自明性を揺るがし、新たな視点を獲得することが可能です。自分を嫌いになる程見つめ直すことは辛いことでしたが、今から思えば強い衝撃を受けてできた「ほころび」を縫い直すことで自分が前よりも強化されていったと実感しています。

先述した模擬国連で得ることのできたスキルについて少し言及したいと思います。

まず、リーダーシップについて。リーダーとしてふさわしい資質は一つではなく、自分に最も適合するリーダー像を追求することが重要なのですが、圧倒的能力によって屹立するにしても、気の利いた発言で静かにグループの中核として存在するにしても、他のメンバーからリーダーだと認められなければいけません。そのため何が必要か、絶えず自分に自問自答し続けることとなります。それが理由で辛いときもありましたが、追求し続ける価値のあることだと思っています。

次に、交渉力について。交渉において重要なことは相手に自分が利益を得たように「思わせる」ことだと考えています。どちらも winwin な関係というのは一方の戦略によって生み出されたもので、実際に交渉において利害関係は対立することがほとんどであると思います。つまり、winwin を目指そうとするのは交渉において不利にある側が、相手が交渉において自分が有利な立場にあることを気づかないうちに繰り出す先手として捉えることも可能だと思います。

参加者報告（派遣生）

この例はあくまで自説ですが、交渉の「戦略性」にも模擬国連の面白さがあると思います。

また、私は模擬国連という活動よりも国際問題について深く考える機会はないと思います。なぜなら自分が解決策を話しあう「主体」であるからです。国際問題について受動的な学習しかしてこなかった私は、この活動を通じて世界で今起きていることに目を向けるようになりました。また、自分の発言や行動によって国際社会を変えることができるという「スケール」の大きな感覚を味わえる模擬国連活動は一度参加してみるとやめられない中毒性がありました。模擬国連とは、国際問題について多角的視点で捉えることができるようになると同時に、新たな知識を獲得できる活動だと思います。

さて、今回の模擬国連国際大会は、自分の模擬国連活動の集大成として臨んだ会議でした。長期間準備を行い、議題について深く考えているという自信があったにもかかわらず、苦しい会議展開となりました。周りの英語についていけない。相手の話していることに応答できないため自分のやり方が通用せず、ただ自分の意見を主張することしかできませんでした。さらに、自分が想定していた議論の展開とは全く異なった論点で話し合われることになったので、グループ内での議論からおいていかれました。持参していたホワイトボードを使って一時グループの意見を発表する代表としてスピーチをすることはできましたが、次第に存在感がなくなっていきました。そこで私はたとえ「聞く」ことができなかつたとしても、「話そうとし続ける」という方針に転換しました。自分の政策を決議案に残すということを会議において最低限達成しなければならない目標としていたからです。そのために個人個人やグループ内で論点ごとに別れた小グループを回り、話し合われている内容について自国の意見を述べながら、自国の政策を説明し、同意を得ようと努めました。そして、グループ内の意見がある程度まとまったところで他の大使に質問をして必死についていこうとするようにしました。最後まで諦めないこと。顧問に言われたこの言葉によって、最後まで粘り、決議案投票前のスピーチを行ったところ、賞を受賞した大使から **Good Job!** と褒められたことはよく覚えています。最終的に決議案に自分の政策は残り、決議案も可決させることができました。

会議が終わって国際大会の長い準備期間や本番を振り返って、更にはこれまでの模擬国連活動全体を振り返って、これまでたくさんの人に

支えられて来たのだということを改めて強く実感しました。模擬国連に参加して自分の成長を実感できるような充実感を味わえたのは、模擬国連の仲間がいたからであり、そして何よりも先輩である自分にここまでついてきてくれたペアのおかげです。今大会では受賞を目標にしていたのですが、その目標は達成できず、悔しい思いをしました。しかし、本番に向け努力してきたことは無駄なことではなかったと前向きに捉える事ができました。

また、今回の派遣事業に参加させていただいたことはとても幸せなことであり、貴重な経験ができました。表敬訪問では、普段会えないようなグローバルに活躍なさっている方々に現場からの最先端のお話をいただき、模擬国連をやる上での情報を得る主な手段であるインターネットでは知ることのできないことばかりで、大いに勉強になりました。グローバル・クラスルームの皆様、そして ACCU の皆様を始めとしてこのような素晴らしい機会を作ってくださった方々にこの場を借りて感謝を申し上げたいと思います。



山田 健人

海城高等学校2年

5月11日、12日。それは、私にとって、長く続いた暗闇に、一条の光が差した2日間となりました。

模擬国連を始めてから6年近く経ちます。国際大会までの約半年間は、これまでの模擬国連キャリアの中で経験したことのないほど、辛いものでした。議題や担当国についてのリサーチ、配布資料の作成、スピーチの練習など、作業量は膨大でした。しかしそれよりも、考え続けなければならず、かつ、いくら考え続けても、当日うまくいく保証は全くない、という事実は、私を大いに苦しめました。提案する政策を考えては欠点を見つけ、議論の内容を想定しては違う側面が浮かび上がり、その都度対応を考えるうちに、何のために努力するのが分からなくなってきました。しかし、中途半端な努力では、お世話になってきた方々、全日本大会の他の参加者に申し訳ないと共に、今まで努力してきた自分、大きなチャンスを逃したことになる未来の自分に謝らなければならない、と思ひ、妥協するわけにはいきませんでした。

先が見通せず、諦めそうになる中でも、私はある強い信念だけは失わずにすることができました。国際大会は、猛スピードでまくし立てるアメリカ人、他国の参加者の予想できないような行動、日本とは違う議長団の仕切り方など、衝撃的な出来事が多いと聞いていました。私は、逆に、日本の模擬国連経験者として、あるいは、日本人として、国際大会の他の参加者に衝撃を与えたいと思っていました。

日本の模擬国連のレベルは高く、それが世界に通用しないはずはないと考えました。そこで、議題や担当国についての綿密なリサーチ、議場で非公式に配る資料の作成など、日本の模擬国連経験で行われる準備を徹底的に行いました。その上で、これらの準備や戦略を会議に活かすには、他国の参加者に考えを正確に伝える能力が必要不可欠であり、また、国際大会はスピーチをする機会が多いため、考えを印象的に伝える能力も必要です。しかし、私の英語能力は、自分の意思を自由自在に伝えられるほどのレベルには到底達しておらず、どうしてもつかえてしまう自分に焦りを覚えていました。そこで、全日本大会直後から、政治家等による英語のスピーチを聞き、覚えたものを発音する練習を毎日繰り返しました。

こうして私は、ここまで準備してきたのだから、本当に他国の参加者に衝撃を与えられたら、という淡い期待を抱いてニューヨークに向かいました。

会議当日、淡い期待が確かな手応えへと変わりました。日本の模擬国連、あるいはこれまでの日本での自分の人生を通して培って来たことが、確かに活かされたのです。各国大使が自由に立ち歩き、多くの場合グループを形成して話し合う非公式討議の場面では、他のグループは一握りの国が自国の意見を激しく言い合い、話し合いがなかなか進まない中、ウルグアイが中心となったグループでは、一カ国ずつ全ての国が重要な主張を述べたあと、それらを分類し、分野ごとに話すことができました。要所でそこまでの議論をまとめたり、成果文書の案を転写したものを共有したりして、全員の同意を取りつつ進めることができました。この結果、最後まで、議論の主な要点を簡潔にまとめられる状態にあり続け、また、多くの国の意思を反映した包括的な決議案を作成することができました。日本では全員の意思をなるべく尊重するのが当たり前ですが、こうした意思決定の方法が他国の参加者相手に通用するのか不安に思っていました。しかし、他のグループで話す機会を得られなかった参加者がウルグアイのグループに加わったり、また、グループ内の大使から、「こちらのグループは全員意見が反映できて良い」という声が上がったりするなど、概ね評価されました。また、日本では時間を守ることが当たり前ですが、成果文書の提出期限を過ぎても作業を続ける大使がいる中、ウルグアイが中心となったグループは提出期限までに提出し、余裕を持って交渉を続けることができました。

そして課題であったスピーチも、確かに発音や流暢さでは英語ネイティブの参加者に劣りましたが、英語が下手なりに伝わりやすいスピーチを数多くこなすことができました。十分なりサーチと準備がなければ言うことができない統計資料や決め台詞を織り交ぜつつ、トレーニングの成果で、場面に応じたスピーチをすることができました。レーガンの就任演説に起こされる朝、ブツブツつぶやいていた登下校中、オバマやコフィー・アナンのスピーチを聞きつつ寝てしまう夜—こうした努力がようやく実を結んだのです。

国際大会までの苦悩、努力は決して無駄ではなかったと強く感じることはできたのは、何よりも、会議が楽しかったからです。もちろんうまくいかない部分も多々ありましたが、そうし

た場面でも、価値観の違う他の国の人と、同じ問題について熱心に議論するのが楽しくて仕方がなかったのです。この2日間のためならば、苦しい時間をもう一度過ごしても良いと、自信を持って言えるでしょう。そして閉会式で、参加した議場の最優秀賞としてウルグアイの名前が呼ばれた時よりも心から嬉しかったのは、例えば、他の大使から褒められた時、あるいは、決議案の提出時のスピーチを終えて互いに拍手を送りあった時、そして、担当国の立場の違いに拘らず、多くの大使から”Kento”と呼ばれた時でした。

今大会は私にとって模擬国連活動の締めくくりとなりました。会議終了後、議長からのコメントのメモを取りつつ、次の会議はないのだとふと気付き、微かな寂寥感を抱く自分がいました。

苦しい準備期間に比べると喜んでいられる時間は非常に短かったです。私は次のステージに進みます。しかし、どんな場面に遭おうとも、この国際大会で見出した確かな希望が、自分を前に進めてくれることだろうと思います。

末筆ながら、派遣事業を支えてくださった多くの方々へ、心より感謝申し上げます。



石川 満留

渋谷教育学園渋谷高等学校2年

5月12日、13日の二日間ニューヨークで開催された、高校模擬国連国際大会に出場し、優秀賞を頂きました。まずはこのような貴重な機会をご支援してくださった ACCU をはじめとしたスポンサーの皆様、ならびに昨年11月の全日本高校模擬国連大会から支え続けてくださった先生方、先輩、友人に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

私とペアの長谷川えみりはウルグアイ大使として社会保障問題の議題で ECLAC(ラテンアメリカ経済委員会)の会議に参加しました。ラテンアメリカに根強く残る貧困層の“非社会保障状態”、それによって解決の糸口が見えないジェンダーの不平等性、さらにこの悪循環の追い風のような移民問題など、切っても切り離せないこれらの問題に対し国益を踏まえつつラテンアメリカとしてどんな共通見解を出し、いかに包括的で現実的な解決策を見出していくのかに注力してきました。私たちは、Information Database という各機関と政府の協力によって収集した個人単位の情報統括システムの導入による社会保障制度の普及率の調査、また各機関にアクセスができない Informal Sector(非公式経済者)の把握と正式経済を促すことを目的とした税システム、Monotax の導入を主な政策として掲げ、地域内の脱税の慣習の根絶と教育の促進を含めた包括的な方針がいかに今のラテンアメリカに必要なかを考えました。

会議初日は、予想に反した全体の国数と先進国を中心とした地域外加盟国が多かったことで、ラテンアメリカの地域益を強調しながら地域を先導して行くことを最大の目標としました。各国が用意してきた政策の共有で議場が混沌としていた場面でも常に、何をまず焦点におくかなど根本的な問題に立ち返り冷静になることに努めました。また日本の高校模擬国連と大きく異なり、初日は特に議事録に残るモデレートコーカスがとても多く、残らないアンモデレートコーカスがとても少なかったため、公式発言で限られた時間内がいかに進行中の話を簡潔にまとめ、かつ効果的に議場に訴えかけられる力が問われました。そこで臨機応変性が大きく問われ、注意深くかつ迅速な対応ができるように心掛けました。

会議二日目は初日に提出された二つの作業文書が合体(マージ)することが決定していたので、いかに地域重視の文言にしないといけないのか

を強調するのに、初日より慎重になりました。また、どのように政策を実現して行くのか、例えば財源はどこからくるのか、各システムをどのように導入するのかを詰めて話し合いました。ですが、会議の時間や先進国側の勢いが強く決議案がラテンアメリカには属さない先進国2カ国から提出されてしまったこと、また国際会議の特徴である、手書きの決議案の作成であったことから全体での丁寧な文言確認が実現できなかったことなど至らなかった点も残りました。しかし、私とペアは普段、地道に積み上げる外交とボトムとトップを定める内政を繰り返すことで、異なるグループ間の落とし所や妥協点を見つけることを得意とし、お互い別々の行動ができるのですが、国際大会では見事に連携することができてとても嬉しかった上に今までの努力を発揮できてとても良かったです。

今大会に参加して改めて感じることは、賞の受賞に関係なく文化の違いからくる異なった価値観の中で会議に出席したこと自体が貴重な体験であり、得るものが多かった機会だったと思います。私は実のところ会議が終わって数日たった頃も、会議に出た時の緊張感などを思い出して数多の感情からなる涙を流すことが多々ありました。大使一人一人に丁寧に交渉を働きかけ着実にコンセンサスを目指して行くという、自分が目指す大使像に合致した会議行動ができたことに対する安堵感、優秀賞という有難い受賞に対する達成感とともに、どこか心残りのある会議であったことに対する悔しさを同時に抱きました。この入り混じった感情は、世界という不慣れで刺激的な環境でこそ味わえたものであり、大変貴重な経験をしたのだと痛感しています。模擬国連はもちろん国際情勢や、各国のスタンスの違いなどを学ぶことができ、ものごとの真髄を追求することができる素晴らしい活動です。しかし国際大会でより明確になった私にとっての「模擬国連」は、自分はどのような人なのか、どのような場面で積極的に行動し、どのような場面で尻込みしてしまうのかなど実際に人に囲まれてみないとわからない映し出された自分の姿を直視するものだと感じます。特に緊張と常に隣り合わせの状況で自分を知ることが、自分の得意不得意を明確にし、見直そう、向上しようという意欲を持つことができました。辛いことも多かったですが、その分客観的に見ることができたのかもしれません。

国際大会に参加したことで、俯瞰的に物事を捉える重要性を実感し、自分にとっての模擬国連の意義を再考する機会を得ることができまし

た。模擬国連であっても何であっても、何のために自分は頑張るのかを見つけ出すことは、自らの行動の価値を高めるだけでなく、モチベーションの向上にも繋がります。私はこれからの人生において俯瞰的に意義を捉える重要性を模擬国連、特に国際大会を通して学べたと思います。そして何より、類似した辛さやもどかしさを味わっている分、苦勞していることを汲み取ってくれ寄り添える、ペアをはじめとした日本派遣団の仲間との出会いがかけがいのないものとなりました。

国連本部の総会議場に足を踏み込んだ瞬間、胸にグッとくるほどの圧倒感と荘厳な雰囲気を感じられ、今もそしてこれからもあの感触を忘れることはありません。世界には多くの価値観や意見が混在し、その中で均衡と平和を目指そうと日々解決策を練っている団体が数多く存在します。国際大会は、立ち止まってはられないという私への警鐘でした。未だ限られたコミュニティに属する私は、視野を広げる機会をこれからも得ていきたいです。



鶴巻 明梨

渋谷教育学園渋谷高等学校2年

「模擬国連をすることは世界平和につながるのか？」これは全米派遣前に私が自分に課した一つの問いです。派遣一か月前、OB,OGの先輩方と11期で英語のグループディスカッションをする機会がありました。一つのテーマが“What is one thing we can do for peace?”。私の尊敬する先輩が“DO MUN!”と言いました。でも私は先輩のその回答には納得できませんでした。たかが高校模擬国連をすることで世界平和に繋がるわけがないからです。この先輩は去年の派遣でそう思ったに違いない、私もそう思えるだろうか、と自分にこの問いを課しました。派遣を終えた私なりの結論は「繋がらない」でした。正確に言えば、「模擬国連に参加するだけでは繋がらない。」です。所詮高校模擬国連は国際法も学んでいない高校生のアイデア力、話す力勝負などところがあります。参加することに満足してはいけない競技だと思えます。では高校模擬国連に興味はないのか。これには私は自信をもって「ある」と答えます。私が模擬国連を通して伸ばすことができたもの、そして私なりの高校模擬国連の存在意義について、NY派遣の経験を絡めながら皆さんにお伝えできたらと思います。

まず私個人が模擬国連で伸ばすことができたものは大きく3つです。精神力、自己分析力そして行動力です。持久系スポーツではないのだから精神力が鍛えられるわけがないと思われるかもしれませんが。私は、模擬国連は持久系スポーツだと思えます。議題を理解したと思ったら違っているなんてことは多々あります。私達が参加した死刑制度の議論においては最初の一か月以上、「どのように死刑存置国を減らすか」を考えていました。実際リサーチと議題解説書の読み込みをやり直したら「どのように執行数を減らすか」でした。準備段階でも何度も心が折れるという

のに、会議本番ではもっと折れます。国際大会では、初日はグループのスポンサー（成果文書の提出国）としてそこそこ上手く終わり、でもこのままリーダー国に流されているのは埋もれてしまう、芯をもって行動しようと迎えた二日目。コンバイン（他のグループとの意見統合）を推したものの結局反対派の意見を動かすことができず、コンバインしないことに。コンバインの代わりにシグナトリー（成果文書の署名国）集め交渉が始まるも上手く存在感を発揮することができず、何度も帰りたと思いました。でも帰るわけにはいかないし、Unmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ）が始まれば席で座っているわけにもいかない。もう霧散しそうな精神力をかき集めて席から動いて、条文への質問に答えたり、シグナトリー交渉をしに来る他グループの大使の話の聞いたりしていました。今は議論を共有したりコンバインを進めようとしたりする姿勢が評価されたのだろうかと考えていますが、“The honorable mention award goes to… Cape Verde.”と呼ばれたときは喜びよりも理解できないという気持ちの方が強かったです。準備期間で半年、一つの議題に向き合い続け、会議中の二日間は頭も足もフル回転で乗り切ろうとする中で確実に精神力を鍛えられたと思います。

二つ目は自己分析力です。模擬国連には様々な大使がいます。大使が多い議場になるほど、自己分析を通して自分の強みを最大化して差別化することが必要になります。例えば国際大会においては英語力の壁は弱みとして確実でした。英語力自体はオンライン英会話でなるべく伸ばすとして、さらに英語力以外でグループを纏める大使となるための材料を考えました。そしてペアと「議論の可視化ができる大使」であろうと心がけました。具体的にはホワイトボードやスケッチブックを使って議論を整理したり、人数が多い時はポストイットを使って観点を落とさないように心がけたりしました。アメリカ人

をはじめとする参加者が論点の順序を気にせず思ったことをどんどん出していくタイプのテンポの速い議論だったこともあり、本番で活かすことができました。

最後に、行動力です。特に「今まで躊躇していたことを行動に移す力」です。国際大会では、「議長をはじめとするフロントとのコミュニケーション」を意識しました。国際大会は全日本大会と比べあまりにも不確定要素が多いです。Working Paper（作業文書：WP）やDraft Resolution（成果文書案：DR）の提出時間は事前に決まっていない、どの先輩方、先生方にお話を伺っても、結論は「議長による」に達してしまう。数えだしたらキリがありません。わからない議事進行をそのままにせずにモーションを出して質問してみることを意識しました。幸いにも議長が教育的模擬国連を重視する方であったため、質問を出しても快く答えて下さりました。日本での自分では「そんな初心者に見られそうなことはしない！」と意地を張っていたと思います。しかし、国際大会において自分が初心者なのは紛れもない事実であり、「やらないうで後悔よりやって後悔！」と自分に言い聞かせて行動に移すことができました。今までの会議から一つだけでも変わることを毎回毎回の課題にする中で行動力が鍛えられました。

さて、これらは私個人が模擬国連に鍛えられたと感じる力です。ではもっと大きな、高校模擬国連の存在意義とはなんのでしょうか。一つは、BG、リサーチを通して、国際問題をトピック別に学ぶことができることだと思います。実際の社会では複雑に絡まりあっている国際問題を、意図的に部分抽出して整理できる機会はとても貴重です。そしてそれ以上に、私は「高校生が国際問題を議論できるプラットフォームであること」自体に存在意義を見出しています。もちろん国際法を反映した内容でなかったり、毎度毎度、教育や資金援助が解決案として提案され

たりします。それでも、調子に乗っているよねとか結局何もわかっていないでしょとか言われることなく、参加している間だけは国の代表になりきって一人前に議論する機会があること自体が意義だと私は考えています。最初の私の答えに戻りましょう。「模擬国連に参加すること自体は平和に繋がらない。」“we're marine vets, your kindness counts.”初日の表敬訪問に向かう道のりの中、ホームレス男女組が路上に置いていた缶に書かれていました。彼らは気温十度ぐらいのNYでお互いを温めあうように座っていました。ホテル内の大きな会議室で、アメリカ人が提案したCreation of the African Union Fund for reforming judicial systemをいいねいいねと流しながら、何かもう全てを諦めているような表情で道路を見つめているホームレスとは目が合わないように無視している自分がいました。模擬国連に参加するのはとても刺激的なことです。しかし、その一方でそれに満足してはいけなないとNY派遣を通して強く感じました。俯瞰的に国際問題を学ぶ中で増やした引き出し、そして議論と現実の差に感じたもやもやを基に、実際に行動に起こした時、高校模擬国連活動は平和に繋がると言えると思います。そして派遣生としてそういう人でありたいと思います。

最後に、この活動を支えてくださった全ての方に深く御礼申し上げます。辛いことも何度もペアと共有しましたがそれを乗り越えることができたのは皆様のおかげです。本当にありがとうございました。



柳津 聡

灘高等学校 3年

渡米のために空港へ向かう電車の中、僕は椅子に縮こまって不安に苛まれていました。自分はどこまで会議で通用するのか。「国際大会は今までの模擬国連ライフの集大成」と言えば聞こえはいいが、自分は結局模擬国連を2年間続けて何を得たのか。答えのない疑問が浮かんで消えて行きました。国際大会に日本代表として参加する機会はあまりにも圧倒的で、冷静に向き合うことができなかつたのでしょう。しかしNY派遣のおかげで今、模擬国連、そして自分自身を新たな視点から見つめ直せるようになったと僕は自信を持って言えます。ここでは会議を振り返り、自分なりに考えた模擬国連の意義について書きたいと思います。

まず会議について。僕達は軍縮を扱う国連総会第一委員会にて、化学兵器問題を議論しました。会議初日はチャンスに恵まれ、それを掴むことができた日です。初動には失敗しましたが、形成過程の大きなグループにちゃっかり溶け込み、ホワイトボードを使って議論をまとめました。その後もアメリカ人の弾丸のような早い英語に圧倒されかけるも、しっかりと自国の政策であるキャパシティ・ビルディングを売り込み、白熱した議論を適宜ホワイトボードにまとめることでリーダー格の一人に残ることができました。

会議2日目。僕はチャンスを自分で作り出せるはずでした。しかし、何もできませんでした。議長の意向で5つのグループが一度にコンバイン（他のグループとの意見統合）して60カ国以上がごった返しになり、大使があちらこちらで叫んでいる議場で、「こんな壮絶な光景に少なくとも高校中はまだ見合わせない」と我を忘れ感じたのを覚えています。大使が雑多に集まっている場に行っては、たまに二言三言喋るのが精

一杯でした。そして、提出直前に各グループの中樞が集まって、「じゃあここ、とことこ、ここね」と一瞬で決まったスポンサー（成果文書の提出国）枠の中にカーボヴェルデの名前はありませんでした。

その瞬間に僕の思考は止まってしまい、席に戻ってからは涙を堪えるのが精一杯でした。そして昼休みには、今までサポートしてくださった大学生の方々の前で涙を流しました。受賞にはスポンサーになるのが最重要、とのアドバイスを過去の派遣生の方々から伺っていた僕は、何のために議場に戻るのかという問いにぶつかりました。そこでふと思い出したのは、自分はカーボベルデ共和国の大使として約50万の国民の命を背負っている、という当たり前の事実だったのです。模擬国連における最も基本的な事実が、僕の重い足を押ししてくれました。ないがしろにしてきた大使の責務に向き合い、会議をやり抜くことができた。これが今のところ、一番自分にとって誇らしいことです。

僕は渡米前、国際大会の目標を、「今までの模擬国連で得た能力を発揮し、自分の人間的成長を実感する」と決めました。国際大会を終えて、その目的は曲がりなりにも達成できた、と感じています。今のところ、2年間の模擬国連活動で得た成長を僕は3つの分野にカテゴライズしています。1つ目は、コミュニケーション能力です。どんな渾身の政策を準備しても、周りの協力がないと何も進みませんし、対立する立場の国と歩み寄らなければ決議案は通りません。それも相手の性格、考えに応じて自分も方法（言葉、スピード、強弱、姿勢など）を変える必要があります。全日本大会では丁寧に合意を取りつつ、協調のために自己主張を抑えて臨みました。一方国際大会では、主張の激しいアメリカ人の中で埋もれないように強いトーンで発言し、いかにグループの中で自分の発言がインパクトを残せるかを意識しました。時と場合に応じて最適なコミュニケーション姿勢

で臨む大切さを模擬国連は教えてくれました。

2点目は、戦略性です。大使として参加している以上、達成しなければいけない国益があります。単に議論して、言いたいことを言っているだけでは、国益は最大化できません。次に議場で何が起るか、を左右できるのが最も望ましいです。どの国とどの段階で交渉し、「今なぜ自分がこの行動」とっているのか、という目的意識・大局的視点を持って行動することを学びました。国際大会では、僕達は「相手の土俵に踊らされない」をモットーに臨みました。同じ英語力で議論できないのはしょうがない。発言するのが目的ではなく、グループを運営して決議案作成を主導するのが目的。では、英語力以外でどう優位に立って、グループの運営に携わるか。この精神が、1日目の成功に繋がっていました。

最後に、責任意識です。模擬国連は、負おうと思えばいくらでも責任を負わせてくれるフィールドだと感じています。もしも国際大会でグループリーダーにでもなれば、担当国の国民、ペア、他のグループメンバー、全日本大会で涙を飲んだ参加者達、その他お世話になった方々の思いを背負っていることを意味します。逃げ出したくなるような重圧ですが、そのパワーが会議中に自分をいつもとは違う自分にしてくれます。普段より自信を持っている様にスピーチしたり、時間管理に気をつけたり。プレッシャーが、自分が成長する起爆剤となってくれています。

僕にとって模擬国連は多くの学びを得られる機会でありつつも、それ自体が本当に楽しい活動でした。「一国の大使になりきって交渉する非日常的环境で、自分の一挙手一投足が国際社会を動かすことができる」という感覚を、僕は楽しんでいました。会議の準備の度には本番をどう切り抜けようと悩み、振り返りの度には「なぜこれができなかったのか」と悩みます。しかし、会議中の高揚感はその心労を上回るもので、それが模擬国連を二年間以上続けてきた原動力でした。そし

てその興奮は国際大会でも感じる事ができました。自分が涙できるほど没頭できるものを見つけたことにただただ感謝でいっぱいです。

「模擬国連なんて机上の空論で、世界を変えることはできない」と言う人がいます。僕もNY派遣まではその一人でした。国際問題を題材にしているだけで、実態はむしろ交渉力コンテストなのではないか、と考えていました。しかし、日本と全くスタイルの違うアメリカの Model United Nations に参加し、両方の高校模擬国連に共通する意義を追求した際に、一国の大使として国際問題を議論することの重要な意味に気付いたつもりです。

高校模擬国連の本質は、国際問題の専門家になることではありません。その本質は、参加者にとって国際問題が外国の問題・他人事ではなく、「自分ごと」になることだと思います。単に意見を持っているだけでは不十分です。責任ある一国の大使として、そのアイデアを決議案に具現化するために、行動しないといけません。それは会議戦略をしっかりと構築することかもしれないし、リーダーシップを取ることかもしれないでしょう。シリア内戦から、近場のゴミ問題まで、全ての社会課題の解決は主体者として真剣に考えることから始まります。僕にとって模擬国連は、模擬国連、国際問題を責任ある主体者として掘り下げさせてくれる場だったと今回気付かされました。

一国の大使として、一人の人間として。「もぎこっかー」ならば一度は聞いたことがあるフレーズかもしれません。NY派遣を終えて、このフレーズの持つ本当の重みを少しは理解できるようになった気がします。模擬国連にさよならをいう時は遅からず来るでしょうが、授かった教訓を忘れず、主体者として一歩ずつ世界に貢献できる人材になるつもりです。最後になりましたが、今回の派遣事業を支えてくださった全ての方に感謝を申し上げて、僕の報告書を締めたい

と思います。誠にありがとうございました。

